

うねむれ やまだ 有年牟礼・山田遺跡 現地説明会

平成24年3月20日(祝)午後1時30分～

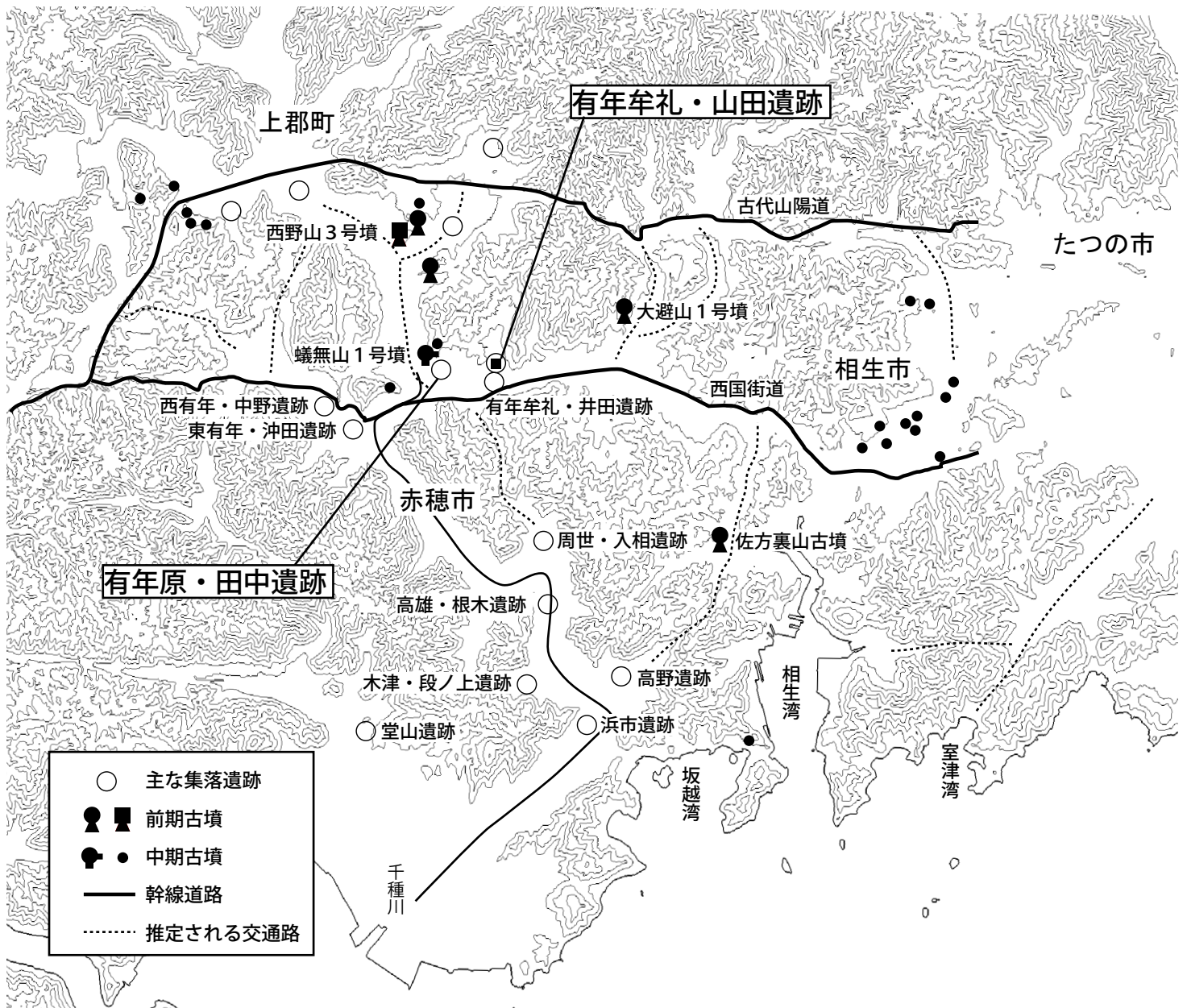
赤穂市教育委員会生涯学習課文化財係

赤穂市立有年考古館

1 有年の古代遺跡

「文化財の宝庫」と呼ばれる有年地域には、多くの古代遺跡が今も眠っています。とりわけ、東の相生市から北の上郡町へと抜けるルートは、(1) 相生湾や室津といった海路から、古代山陽道が通っていた上郡町へ、そして(2) 赤穂市南部から千種川をさかのぼって上郡町へ抜ける道として、特に重要な位置を占めていました。そのもっとも重要な地域は、有年原地区であり、有年原・田中遺跡や蟻無山1号墳が所在しています。

有年原・田中遺跡は、弥生時代から続く大集落遺跡であり、弥生時代には大規模な円形の墳丘墓のほか、銅鐸形土製品、分銅形土製品などが、そして古墳時代には、朝鮮半島の新羅から運ばれた土器など、特筆すべきものが出土しています。蟻無山1号墳は、古墳時代中期として



は千種川流域最大規模の古墳であり、馬形埴輪や船形埴輪をはじめとした各種形象埴輪のほか、初期須恵器と呼ばれる、朝鮮半島からの渡来人が何らかのかかわりを持った土器が見つっています。今回報告する有年牟礼・山田遺跡でも、「秦」と線刻された平安時代の須恵器が出土しており、有年地域は、渡来系の文化が色濃く見られる、先進的な文化を誇っていました。

2 有年牟礼・山田遺跡の調査経緯

有年牟礼・山田遺跡の発見

有年牟礼・山田遺跡は、有年牟礼地区ほ場整備事業（昭和61年起工）に伴って行われた事前の分布調査（昭和60年5月）により、発見された遺跡です。昭和61年度から実施された発掘調査では、弥生時代中期の竪穴建物跡や古墳時代から鎌倉時代にいたる掘立柱建物跡群が数多く見つかり、有年でも有年原・田中遺跡、東有年・沖田遺跡にならぶ集落遺跡であることが判明しています。特筆すべき遺物としては、「秦」と刻まれた平安時代の須恵器があり、赤穂と渡来人「秦氏」との関係がうかがわせる資料となっています。



『秦』刻書土器

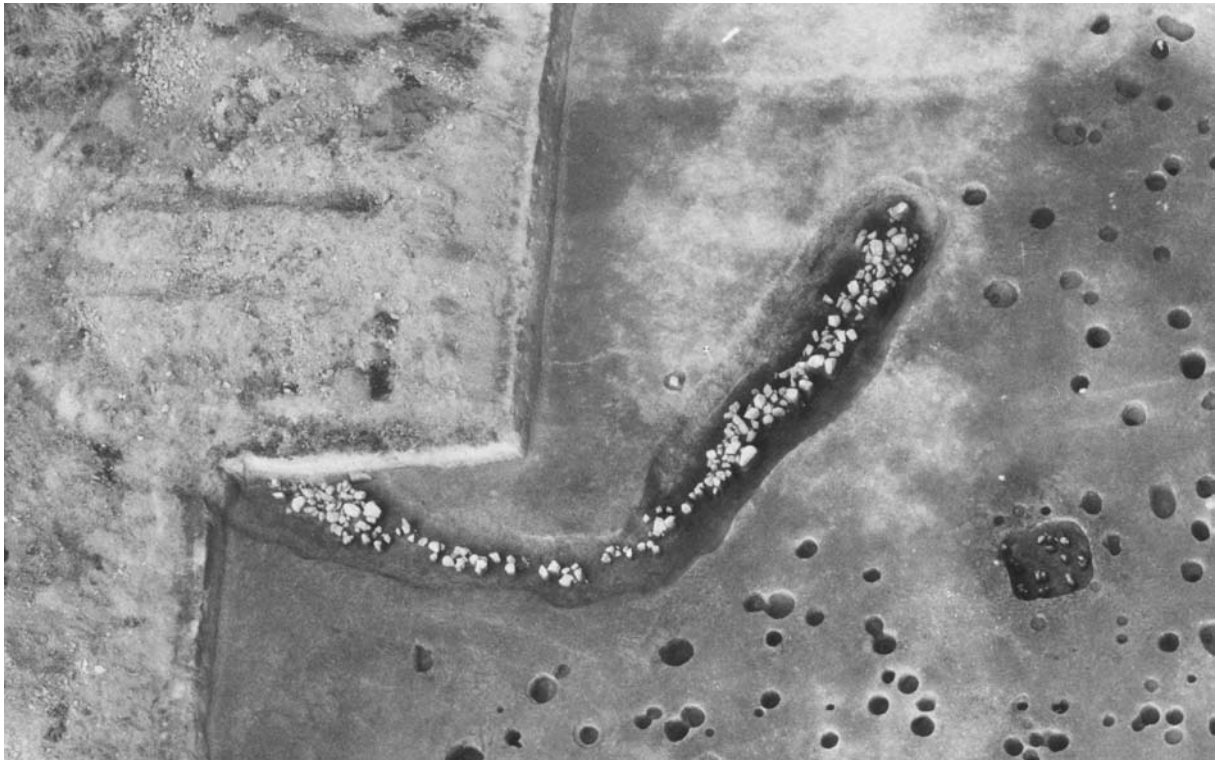
「L」字形に曲がる大溝

昭和63年度の調査で注目されたのが、「第2トレンチ」と呼ばれた調査区の北西で見つかった「L」字形に曲がる大溝でした。この大溝は、実績報告書によれば「幅約2.5m、深さ0.8mを持つ。溝中には、割石による礫石列が存在した。また、弥生時代中期の壺や須恵器などが出土した。遺構性格としては、不明である」とあります。発掘調査後における協議により、この遺構は保存されることとなったため、遺構の性格を把握ための調査は、将来に託されました。

大溝の評価

しかし、調査終了後にこの大溝から出土した遺物を接合・復元してみると、弥生時代中期と思われていた土器は、弥生時代末～古墳時代初頭のもので、しかもかなり大型の土器であることが判明しました。さらに、土器3点のうち1点は、有年原・田中遺跡の「装飾器台（当時は「特殊な器台」と呼称）」とよく似た大変珍しいものです。また、ほかの2点については、チョコレート色をした見慣れない土器で、また形からも赤穂産でないことがすぐわかりました。この時期に集落遺跡で一般的に見つかる土器は、装飾のないものがほとんどですが、これらの土器には多くの装飾が施され、墓に伴う土器である可能性が高いと言えます。

その結果、「L」字形に曲がる大溝は、周囲に四角く溝を掘って中央に盛土する「方形周



昭和 63 年度発掘調査時の空中写真

溝墓」の可能性が高く、しかも、溝を完周させずに一部を掘り残した「陸橋部をもつ方形周溝墓」である可能性が考えられました。しかし、調査面積が狭く、果たして本当に方形にめぐめるのか、円形にめぐめるのか、わからないままでした。事実、赤穂市内には方形周溝墓が見つかったことはなく、判断は保留とされました。

その後

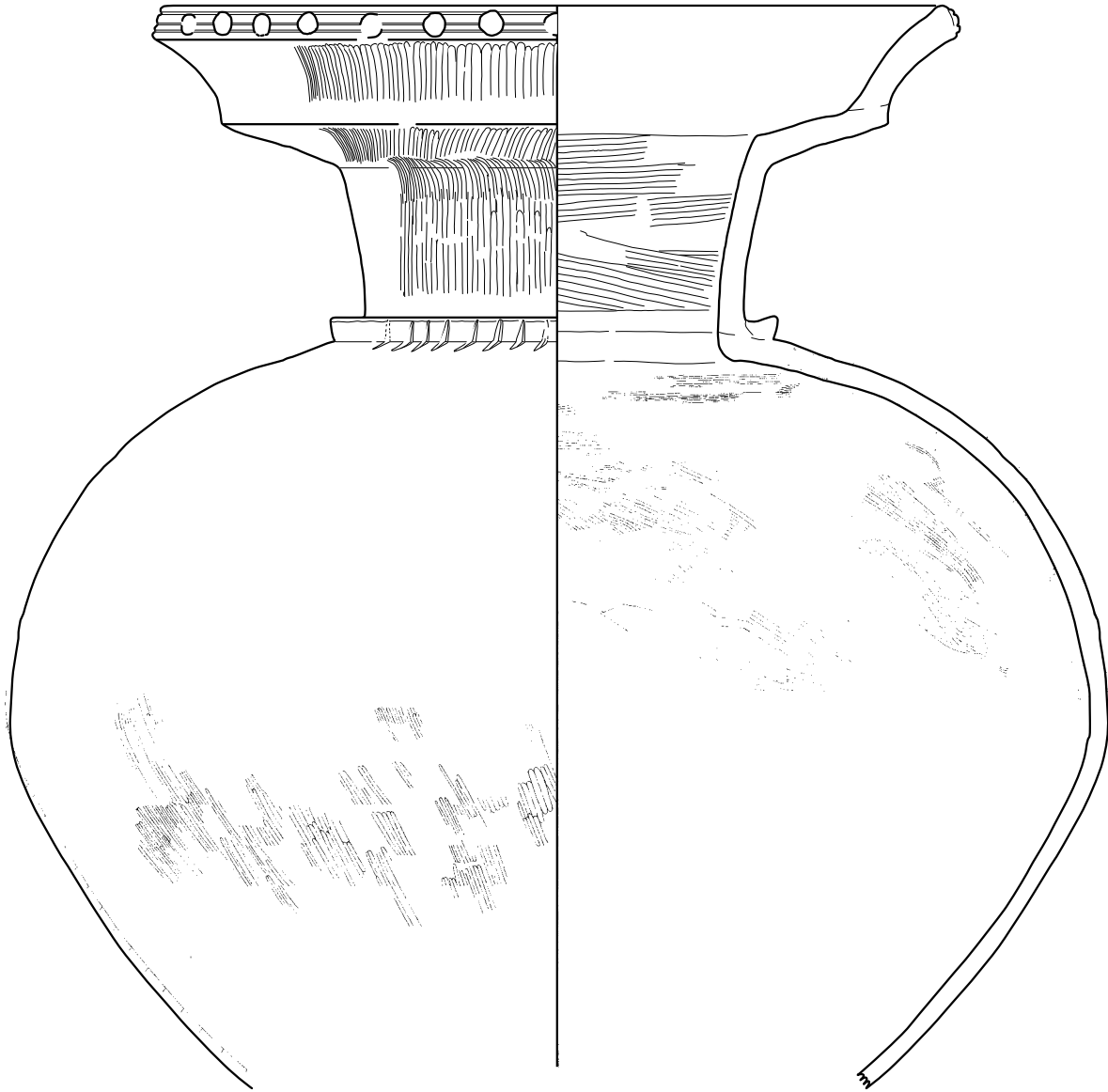
詳細なことがわからなくても、この遺跡の重要性は明らかになりましたが、ほ場整備後は調査されることもなく、水田として使用され、「文化財の宝庫」と呼ばれる有年地域のなかで、有年原・田中遺跡や東有年・沖田遺跡、蟻無山古墳群、塚山古墳群、木虎谷古墳群といった著名な遺跡に隠れ、その検討はなかなかできませんでした。

重要遺跡としての再評価

赤穂市教育委員会では、市内の重要遺跡について、基礎資料を得るための継続的な調査を実施しています。平成 21 年度には、有年牟礼の塚山古墳群の測量調査、平成 22 年度には、有年原の蟻無山古墳群の測量調査を実施しています。そして平成 23 年度には、赤穂市立有年考古館の開館や、平成 23 年 1 月に策定した赤穂市総合計画のなかにおいて、文化財センター設立をうたうなどを契機として、有年牟礼・山田遺跡の発掘調査を実施したのです。

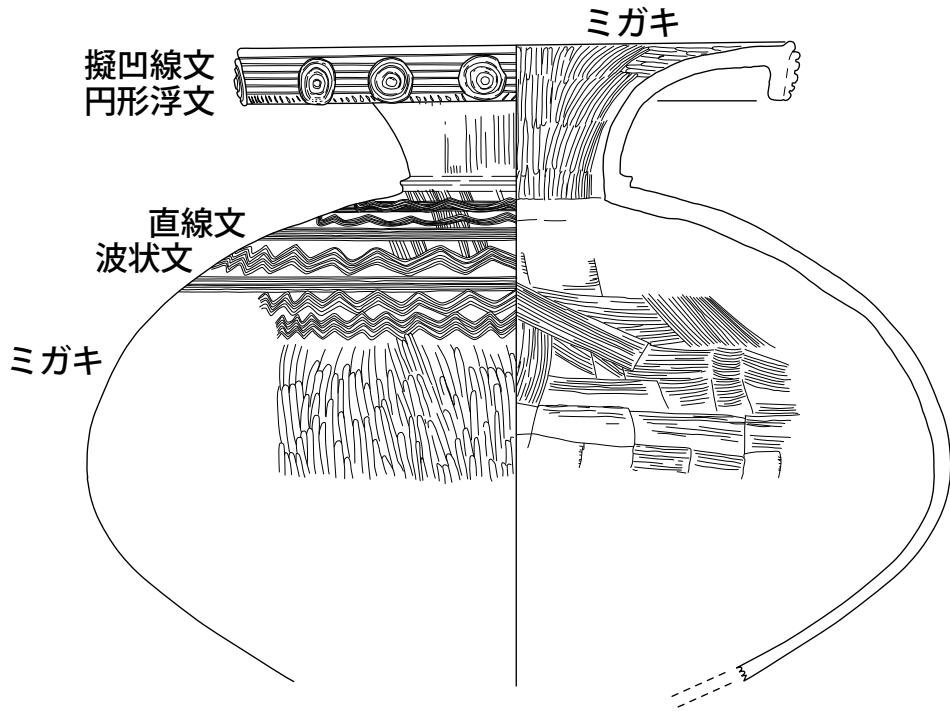
出土遺物の再整理

今回の発掘調査に先立ち、以前の発掘調査で出土した土器片の接合・復元作業を行ったところ、大型の複合口縁壺が、口縁から底部付近まで接合できることとなり、全体像がわかり



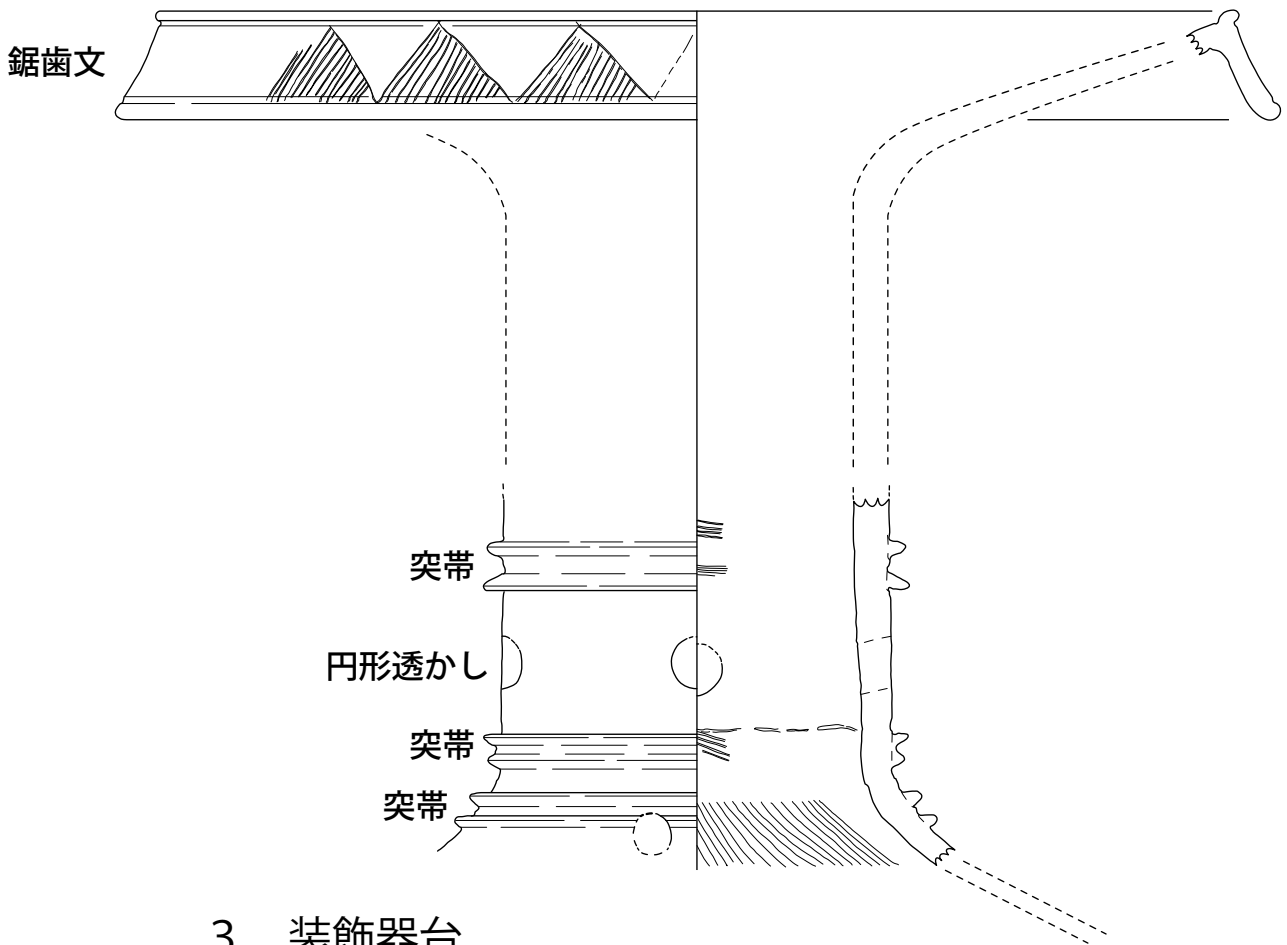
周溝墓の溝から出土した土器 (1) (S=1/3)

ました。また、チョコレート色をした2つの土器は、土器に含まれる「角閃石(かくせんせき)」という鉱物の存在から、大阪府(生駒西麓)産もしくは香川県産の土器であることも判明しました。これらの土器が、どちらかの地域から運ばれ、この墓に供えられたこととなり、有年牟礼・山田遺跡の価値はさらに高まることとなりました。



2 裝飾広口壺

鋳物に「角閃石」を含む、讃岐産の土器



3 裝飾器台

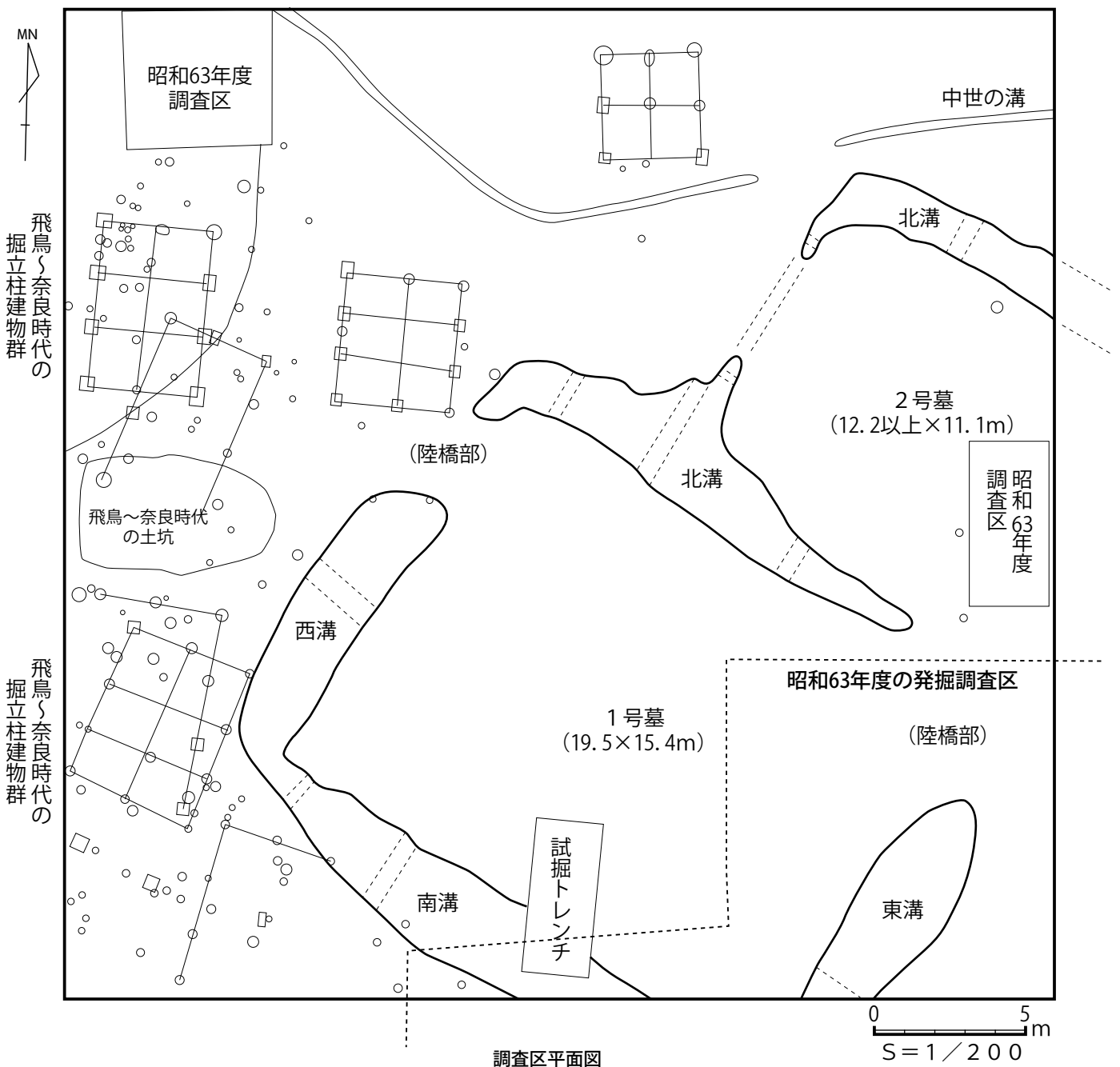
地元産？鋸歯文は岡山との関係をうかがわせる

周溝墓の溝から出土した土器 (2) (S=1/3)

3 今回の調査成果

今回の調査では、目的としていた方形周溝墓を確認できただけでなく、多くの成果を上げることができました。特に、方形周溝墓は、目的としていたものに加えてもう1基見つか、単独で築かれたものでないことが判明したことは、大きな成果となります。

さらに、周辺には飛鳥時代～奈良時代（7～8世紀）の掘立柱建物跡が数多く見つかりました。飛鳥～奈良時代の掘立柱建物跡は、柱穴の配置から建物を復元できるのですが、柱穴の形には円形と方形とがあり、梁行2間、桁行3間の建物が多く見つかっています。また調査区北側では、総柱建物があることから、通し柱のある倉庫として利用されていたと考えられます。こうした建物は、昭和61～63年度に実施された発掘調査でも多く検出されており、相当広範囲に集落が広がっていたことがわかりました。



では、今回見つかった方形周溝墓を見ていきましょう。

■方形周溝墓のデータ■

1号墓

規模：長辺 約19.5m 短辺 約15.4m（溝底にある墳裾からの規模）

※溝の外法での計測では、長辺24m、短辺19m

周溝幅 2m～2.6m 周溝の深さ 最大約50cm

※埋葬施設は、盛土の内にあったために後世に破壊され、見つかりませんでした。

内容：周溝に2ヶ所の陸橋部あり。

周溝内より、人頭大の流紋岩角礫（山石）が多数出土。

出土遺物：昭和63年度の発掘調査で出土した土器は、生駒西麓産（中河内・大阪府）と、讃岐産（香川県）のものと判明。そのほか装飾器台も出土。

※弥生時代後期末～古墳時代初頭の方形周溝墓としては、県内最大級となります。

※方形周溝墓は、岡山県や広島県ではほぼ見つかっておらず、「方形周溝墓地帯」の西端となります。

※周溝内の礫は、墳丘の貼石と考えられます。類例は数少なく、今後の調査研究が望まれます。

2号墓

規模：長辺 12.2m以上 短辺 約11.1m（溝底にある墳裾からの規模）

※溝の外法での計測では、長辺13m以上、短辺13.6m

周溝幅 約1.7m 周溝の深さ 最大約50cm

※埋葬施設は、盛土の内にあったために後世に破壊され、見つかりませんでした。

内容：1号墓の北溝の一部を利用して墓が築かれています。2号方形周溝墓の北溝の西端は、わずかに1号方形周溝墓の方向へ曲がっています。

周溝内より、人頭大の流紋岩角礫（山石）が多数出土。

出土遺物：若干の土器片が出土。

4 有年牟礼・山田遺跡方形周溝墓をめぐる諸問題

方形周溝墓と円形周溝墓

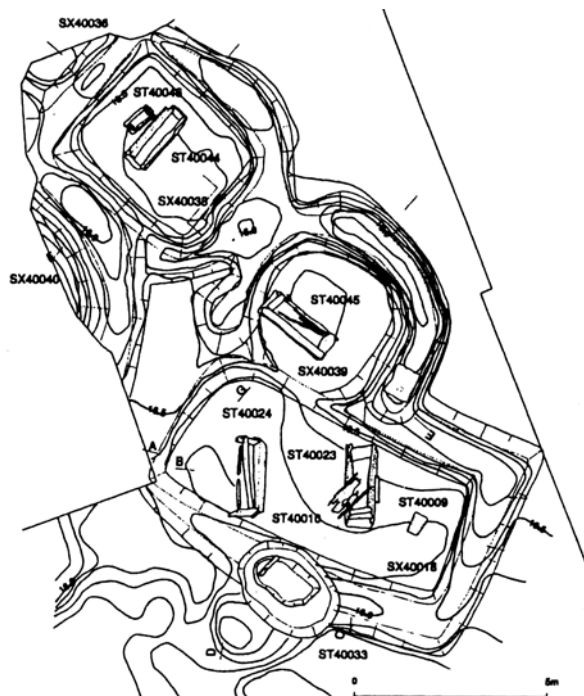
方形周溝墓とは

周囲に溝を掘削し、その土を中央に盛ることで作る、平面形が四角い墓のことです。最も古い弥生時代前期（約 2,500 年前）ものは近畿地方にあり、その後、東西地域へと広がっていきました。播磨地域では、弥生時代中期から築かれています。埋葬は、一人を埋葬（単数埋葬）するものと、複数人数を埋葬（複数埋葬）するものがあります。

円形周溝墓とは

方形周溝墓と同じく、周囲に溝を掘削し、盛土をして墓としますが、形が円形となります。円形周溝墓は、岡山県や四国で弥生時代前期に始まり、中期には播磨で増加し、その後、近畿地方に広がっています。

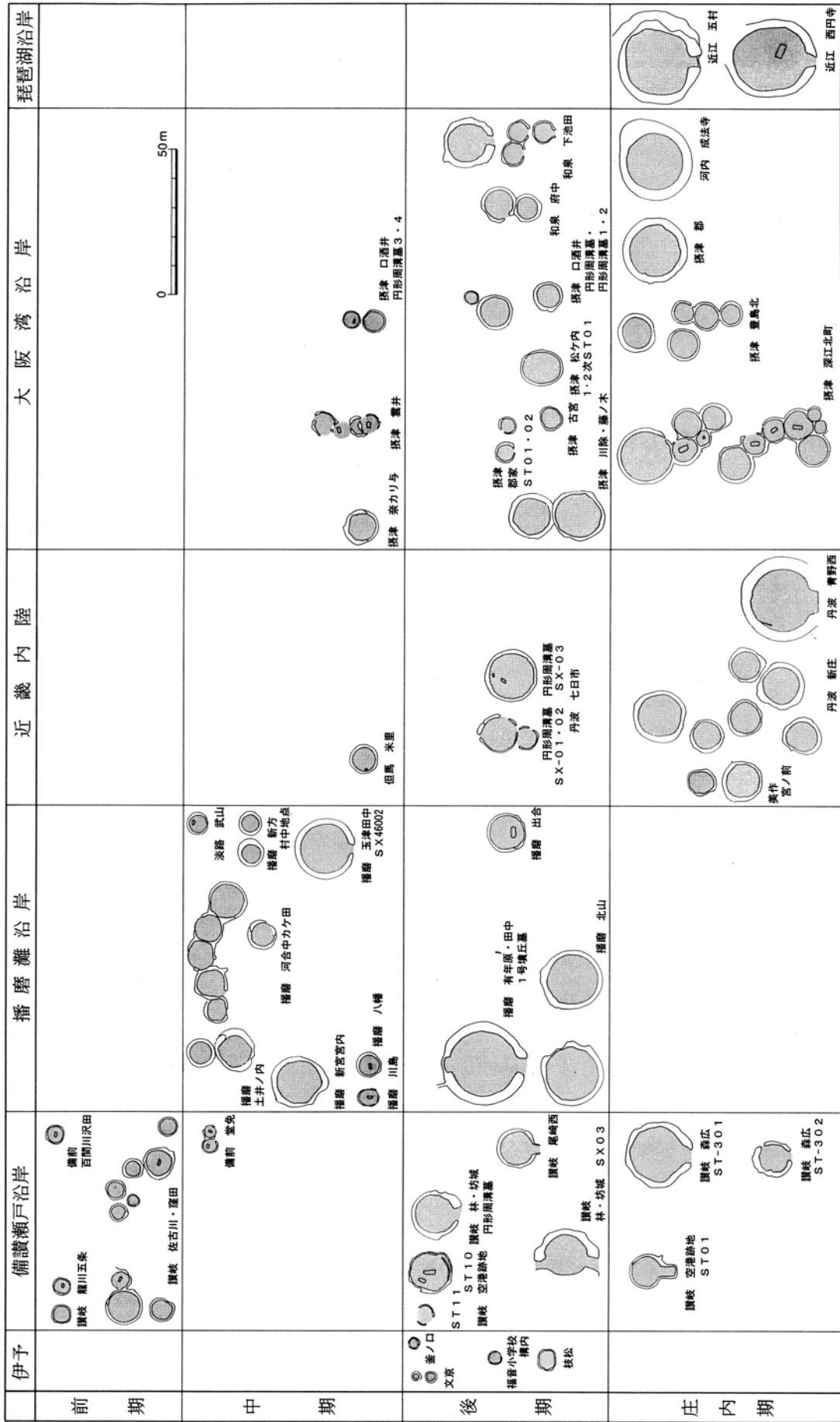
埋葬は、一人の埋葬（単数埋葬）しか行われていません。



方形周溝墓の一例（神戸市西区 玉津田中遺跡）
溝を共有するように、群集して築かれ、複数埋葬されています。

	千種川	揖保川	市川	加古川	明石川
II 期					
上流域					
中流域					
下流域					<input type="checkbox"/>
III 期					
上流域					
中流域		?		<input type="checkbox"/>	
下流域				<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
IV 期					
上流域					
中流域		<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
下流域		<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
V 期～					
上流域		<input type="checkbox"/>			
中流域	<input type="checkbox"/>			<input type="checkbox"/>	
下流域	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

方形周溝墓の普及
東から西に広がっていきます。
最も古いものは近畿地方にあります。



円形周溝墓の西から東への流れ
 (岸本一宏 2001 「弥生時代の低地円丘墓について」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』1より)

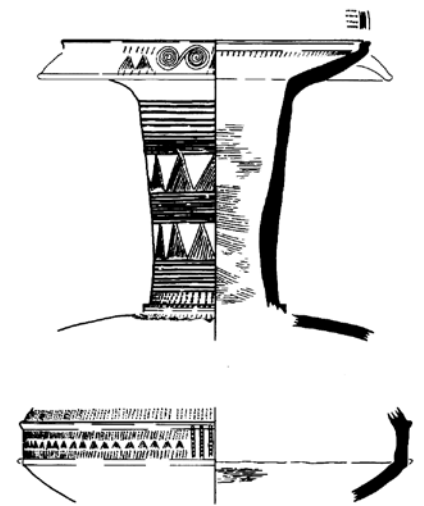
今回見つかった、有年牟礼・山田遺跡の墓は方形周溝墓ですが、この墓を評価するには、近隣にあり、古墳時代の幕開けを研究するうえでの重要資料である、有年原・田中遺跡に触れる必要があります。

有年原・田中遺跡の周溝墓（墳丘墓）

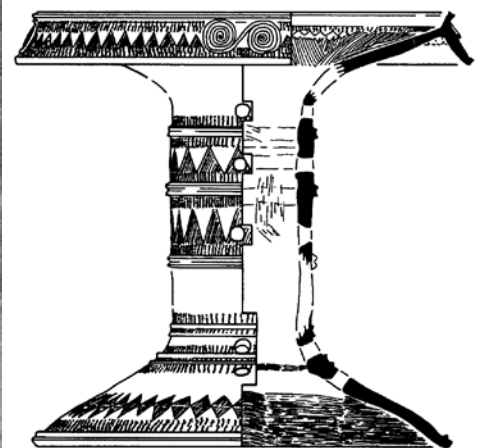
有年原・田中遺跡は、有年牟礼・山田遺跡より約 1.1km 西にある遺跡で、昭和 63 年度に、ほ場整備工事に伴って発掘調査が行われました。この遺跡では、弥生時代中期以降の集落跡が発見されたことに加え、弥生時代後期の円形周溝墓（「墳丘墓」と呼称）が 2 基検出されました。



有年原・田中遺跡 空中写真



裝飾壺



裝飾器台

■円形周溝墓のデータ■

1号円形周溝墓（「1号墳丘墓」）

規模：直径 約19m（溝底にある墳裾からの規模）

※溝の外法での計測では、直径約29m

周溝幅 4～5m 周溝の深さ 約1m

※埋葬施設は、盛土の上にあったために後世に破壊され、見つかりませんでした。

内容：バチ形の突出部（長さ3m）と陸橋部（長さ4m）あり。

墳裾や周溝内より、人頭大の河原石が多数出土。

周溝内に木棺の埋葬あり。

出土遺物：装飾壺、装飾器台、装飾高坏が出土。

2号円形周溝墓（「2号墳丘墓」）

規模：直径 約15m（溝底にある墳裾からの規模）

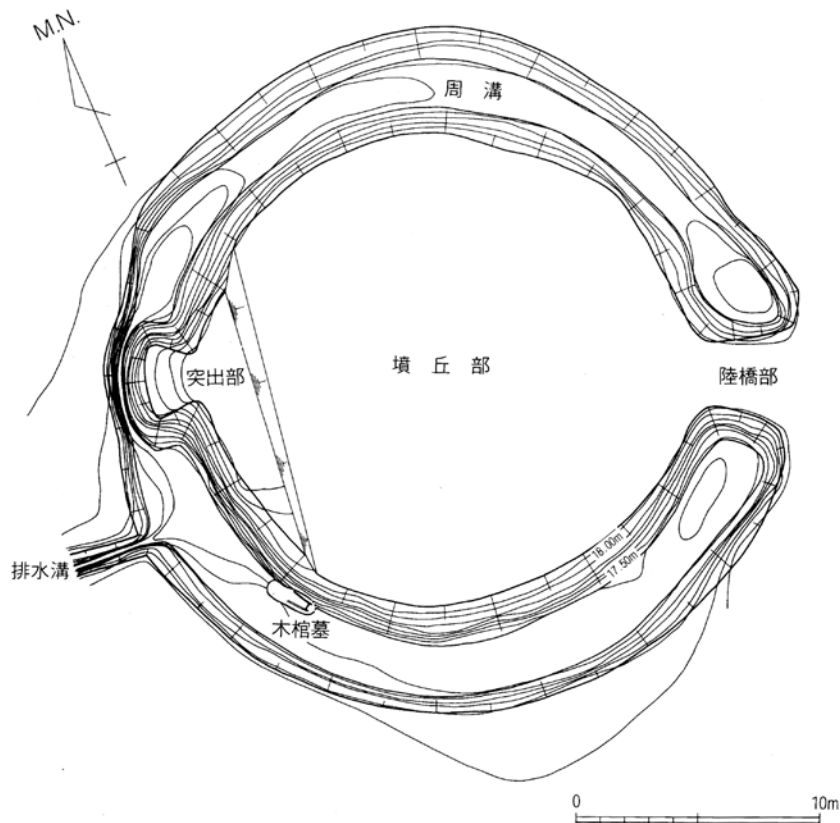
※溝の外法での計測では、直径約19m

周溝幅 2m 周溝の深さ 約0.5m

※埋葬施設は、盛土の上にあったために後世に破壊され、見つかりませんでした。

内容：墳裾や周溝内より、人頭大の河原石が多数出土。

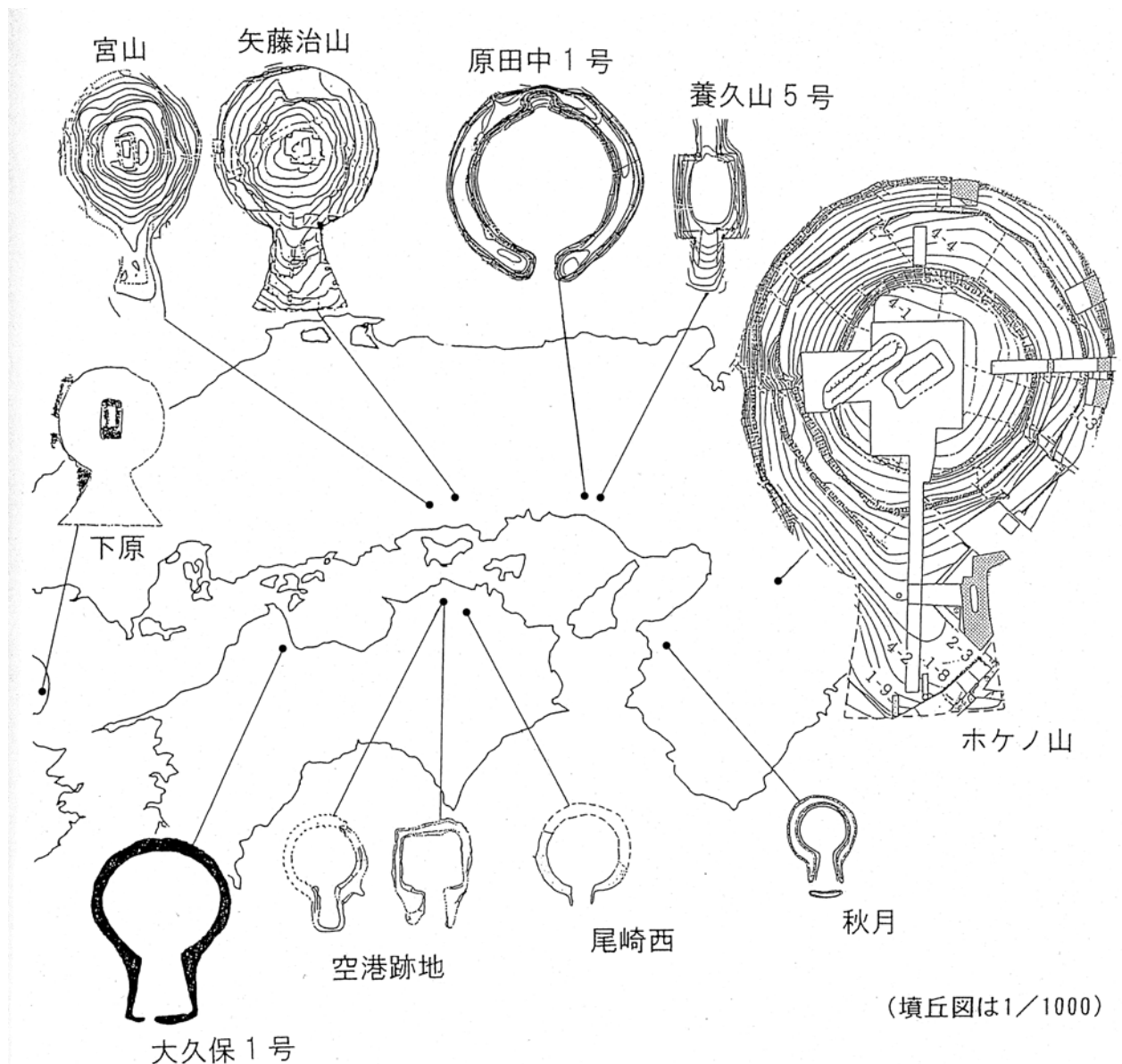
出土遺物：装飾器台片が出土。



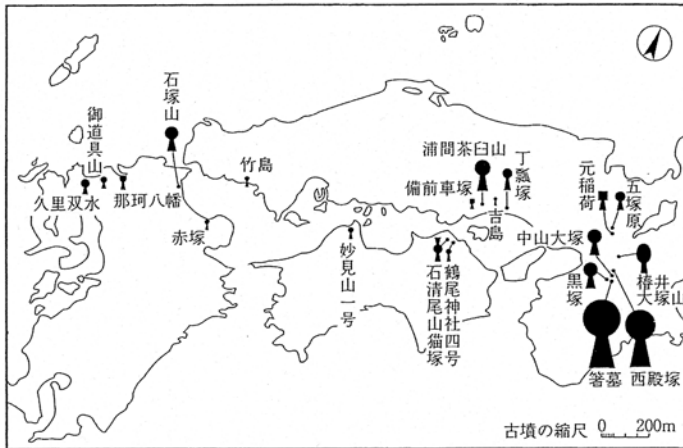
有年原・田中遺跡 1号墳丘墓実測図

東瀬戸内地域の重要性

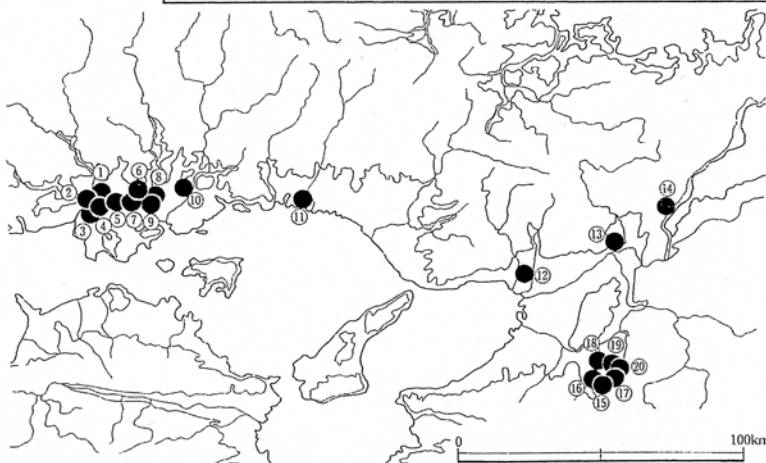
播磨、吉備、讃岐を中心とした「東瀬戸内地域」は、古墳時代の始まりを考えるうえで、大変重要な地域です。その根拠として、この地域には、前方後円墳が生み出される直前のような、特異な形の墓が多数見つかっていること、吉備にある楯築墳丘墓で出土する特殊壺、特殊器台が、古墳時代の始まりの定点となる奈良県箸墓古墳の周濠から出土していることなどが挙げられます。また、古墳時代となり、奈良県に多くの大型前方後円墳が築かれるようになってからも、吉備、播磨、讃岐には、初期の前方後円墳が築かれているのです。つまり、東瀬戸内地域は、前方後円墳を生み出した地域である可能性があるのです。



前方後円墳成立期前後の主な墓制
 (岸本道昭 2006「瀬戸内沿岸の成立期古墳」『古式土師器の年代学』より)



西日本における
出現期古墳の分布



- | | | |
|----------|----------|----------|
| ①矢部B42号墳 | ②矢部大塚古墳 | ③矢部伊能軒遺跡 |
| ④矢部堀越遺跡 | ⑤中山茶白山古墳 | ⑥都月坂1号墳 |
| ⑦七つ塚1号墳 | ⑧網浜茶白山古墳 | ⑨操山109号墳 |
| ⑩浦間茶白山古墳 | ⑪権現山51号墳 | ⑫西川遺跡 |
| ⑬元稲荷古墳 | ⑭壺笠山古墳 | ⑮箸中山古墳 |
| ⑯纏向遺跡 | ⑰中山大塚古墳 | ⑱馬口山古墳 |
| ⑲西殿塚古墳 | ⑳東殿塚古墳 | |

(ただし①は小墳、③・⑫・⑯出土地は性格不明、④は円筒棺ほかに大阪府柏原市玉手山9号墳に東殿塚と同様な退化型が知られている)

都月型円筒埴輪発見の
前方後円(方)墳の分布

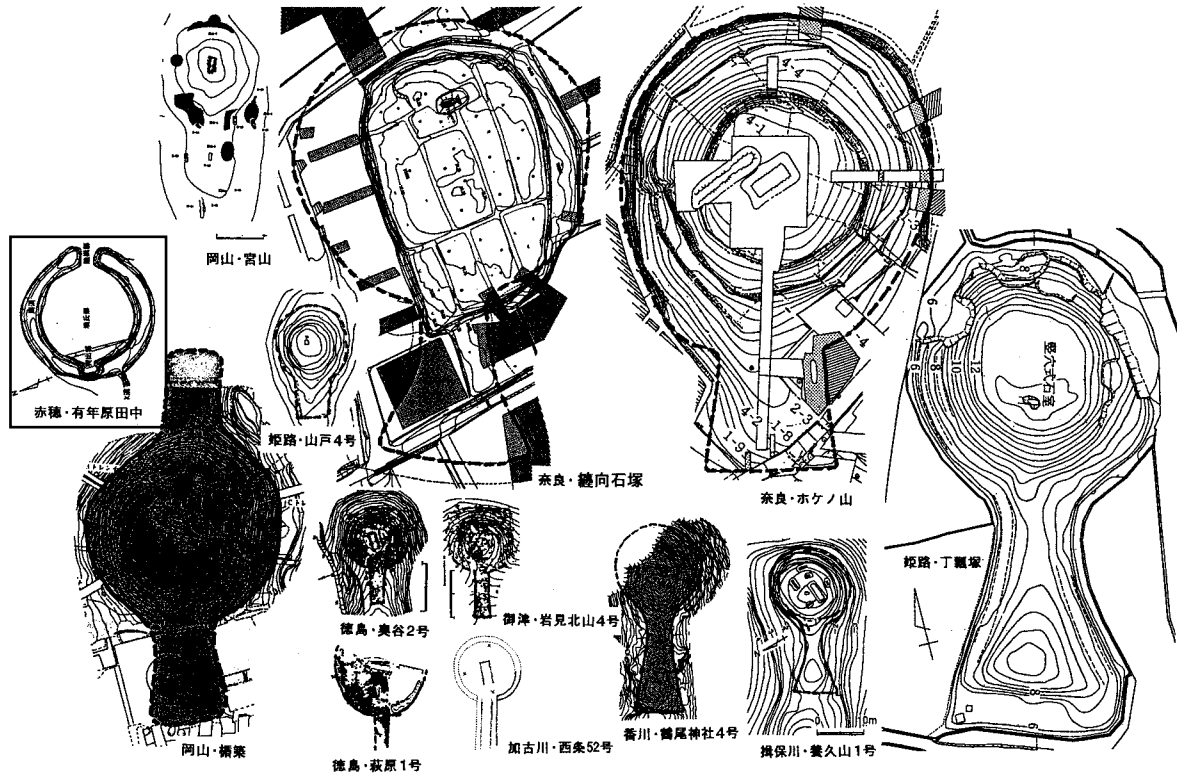
西日本における出現期古墳の分布、初期円筒埴輪出土の前方後円(方)墳の分布
(秋山浩三 2006「吉備・近畿の交流と土器」『古式土師器の年代学』より)

有年原・田中遺跡墳丘墓の評価

有年原・田中遺跡の1号円形墳丘墓は、弥生時代後期であるにも関わらず、その形が古墳時代の前方後円墳を思わせます。突出部はバチ形をしていますが、古墳時代初期の前方後円墳も、いわゆるバチ形の前方部をもっています。また、吉備で生まれ、その後に箸墓古墳にも据えられた「特殊壺」「特殊器台」と呼ばれる大型の装飾土器が、最初期の前方後円墳の祭祀道具であったと考えられるなか、有年原・田中遺跡では、これらを彷彿とさせるような装飾壺と装飾器台が、祭祀道具として使用されています。

有年原・田中遺跡の円形周溝墓は、古墳時代のはじまりを告げた初期前方後円墳で使われた祭祀の道具と、その形を備えていたため、有年地域が前方後円墳を生み出したとまでは言えないまでも、古墳時代の幕開けに向けての権力の集中過程を、この墳丘墓が鮮やかに描き出した遺跡として、全国的に評価されています。

円形周溝墓が1人のための埋葬であることも重要であり、円形に突出部の付く前方後円墳に、最も近い弥生墳丘墓の一つであると言えるでしょう。事実、播磨はこうした前方部のある弥生墳丘墓がいくつか見つかっており(加古川市西条52号墓、たつの市岩見北山4号墓)、有年もその枢要地域であったのです。



東瀬戸内地域における前方後円墳出現直前の墓
(岸本一宏 2008 「周溝墓を中心とした播磨地域の様相」『弥生墓からみた播磨』より)

有年をめぐる評価の動揺

しかし、今回の調査で明らかになった、有年原・田中遺跡墳丘墓の次世代とも言うべき有年牟礼・山田遺跡の方形周溝墓は、こうしたストーリーを大きく動揺させるものになります。

- (1) 前方後円墳への道のりとして評価されていた円形から、方形に変遷したことになる。
- (2) 単数埋葬の円形から、複数埋葬を容認する方形になったことになる。
- (3) 各地で築かれる大規模墳墓と異なり、2号方形周溝墓が隣接していることから、集団墓としての評価も可能となる。

有年原・田中遺跡の円形周溝墓は、古墳時代への順調な権力集中を物語るものでしたが、その後に築かれた有年牟礼・山田遺跡方形周溝墓は、一転してそれを否定するかのようなものになります。これは、弥生墓から前方後円墳への道のりを研究するうえで、大変重大な問題となるのです。しかし、有年原・田中遺跡と有年牟礼・山田遺跡の周溝墓との共通点を考えると、大きな歴史の流れが見えてきます。

有年原・田中遺跡と有年牟礼・山田遺跡周溝墓の比較

2者の共通点

- (1) 大規模墳墓であること。直径／一辺が20mほどを測ります。
- (2) 周溝内に礫が多数出土していること。両者とも貼石が行われています。
- (3) 墓が複数築かれていること。両者とも2基検出されています。
- (4) 供献土器が出土していること。両者ともに装飾器台が出土しています。
- (5) 平野部に築かれていること。

周溝墓をめぐる西と東のせめぎ合い

貼石という特異な方法で墳丘を築き、装飾器台を使って祭祀を行った墓が、それぞれ複数築かれており、有年原・田中遺跡→有年牟礼・山田遺跡という変遷が考えられるということは、当地域における、弥生時代後期から古墳時代初頭への首長墓の変遷を明らかにしたという点で、まず評価されます。また、両者ともに2基築かれていることは、もし仮に複数埋葬であったとしても、群集墓であるという評価ではなく、首長が代々埋葬された累代墓であるという評価が妥当と考えます。

しかしその形が円形から方形に変わっていることは、円形周溝墓が吉備～播磨の東瀬戸内地域の墓制であり、方形周溝墓が近畿地域の墓制であることと関係があるのかもしれませんが。出土土器も、吉備との関係が深い形の装飾壺、装飾器台から、近畿地域にもまれに見られる形の装飾壺、装飾器台に変わっています。

古墳時代研究では、吉備の墓制が、そのまま前方後円墳に繋がったと評価されているわけではありません。吉備では、楯築墳丘墓と呼ばれる巨大墳墓が築かれた後、特殊器台と特殊壺とを用いた祭祀は継続するものの、同じ形の墓は築かれることはありませんでした。

有年地域では、有年原・田中遺跡のように、弥生時代後期に吉備地域の墓制を使用しましたが、その後の古墳時代初頭には、近畿地域の墓制を採用し、祭祀土器も、吉備とは異なる道を歩み始めたのです（当遺跡は、近畿を中心とする「方形周溝墓地帯」の西端となります）。

今回の有年牟礼・山田遺跡方形周溝墓の発見は、古墳時代の始まりを明らかにするにあたり、吉備に隣接したこの地域にあって、西と東のせめぎ合いをより鮮明にしたと言えます。

お知らせ

今回出土した3点の供献土器のほか写真パネルなどを、3月22日（木）～4月9日（月）まで、赤穂市立有年考古館にて展示しています。また、有年原・田中遺跡墳丘墓から出土した装飾壺、装飾器台や装飾高坏も、同時に展示しております。

赤穂市立有年考古館にて現在開催中の企画展（4月9日まで）

「東有年・沖田遺跡県指定20年展」

「時計展一時・刻・ときー2人のコレクションを中心にしてー」